

○ 本事業の背景と目的

「性犯罪・性暴力対策の強化の方針」（令和2年6月性犯罪・性暴力対策強化のための関係府省会議決定）において、関係者が、障害者、男性等を含め、様々な被害者への適切な対応や支援を行えるよう、関係機関において協力しつつ、令和3年度から速やかに性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センター（以下、「ワンストップ支援センター」という。）における性暴力被害者に対する支援実態等に関する調査研究等を行うとともに、研修を実施することとされている。

そこで、本事業では、被害者支援の充実を図るため、関係機関において研修等に活用できるよう、下記のとおり、有識者検討会を設置して、障害者^{注1}、男性等^{注2}を対象とした支援事例についてのヒアリングを実施し、対応に当たって参考となる支援事例集を作成した。

「性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センターにおける障害者、男性等を対象とした支援事例に関するヒアリング」

- 目的：ワンストップ支援センターにおける障害者、男性等を対象とした支援の事例を収集すること。
- 対象：有識者検討会における協議に基づき選定した、7カ所のワンストップ支援センター
- 実施時期：2022年2月3日～3月11日
- 実施方法：オンラインによるヒアリング

○ 有識者検討会の設置

「ワンストップ支援センターにおける障害者、男性等を対象とした支援事例に関するヒアリング」に係る有識者検討会

【検討会委員】

- 大岡 由佳 （武庫川女子大学 短期大学部 心理・人間関係学科 准教授）
- ◎ 加藤 秀一 （明治学院大学 社会学部 社会学科 教授）
- 寺町 東子 （東京きぼう法律事務所 弁護士・社会福祉士・保育士）
- 堀江 まゆみ （白梅学園大学 子ども学部 発達臨床学科 教授）
- 谷田川 知恵 （明治大学 ジェンダー法センター 客員研究員）

※敬称略・五十音順、座長には◎

注1）本ヒアリングでは、相談・支援の過程において、本人及び家族や連携先から情報提供がなされるなどにより、被害者が何らかの障害特性を有していることが判明した事例を対象とした。

注2）本ヒアリングでは、戸籍等の性別または性自認が男性であった事例を対象とした。

○ 障害者に対する支援事例（概要）

障害者に対する支援事例の特徴

- 関係機関（警察、医療機関等）との連携が円滑にできた事例では、被害者の障害特性を踏まえた支援や、二次被害防止のため、連携先との情報共有や事前調整をしていた。なお、障害特性について情報共有を行う場合には、本人に確認するなど、個人情報保護に配慮していた。
- 障害の種類や程度等は事例ごとに様々であり個別性が高いため、支援が困難な場面では、事例ごとに、それぞれの被害者の特性に配慮した適切な対応を検討していた。
 - ・ 本人の意向の丁寧な確認
 - ・ 専門家の助言を受ける
 - ・ キーパーソン（被害者の母親等、支援内容について決定する際等に中心となる人物）との相談
 - ・ 支援者同士（ワンストップ支援センター内の担当者や、連携先の支援者等を含む）での協議 など
- 障害者支援の関係機関（例えば、障害者基幹相談支援センター等）との関わりについては、協働して支援した事例があった一方で、連携がなかった事例が多くみられた。

支援に当たって配慮した点 [障害種別]

面談につながるまで

- 面談予約は、電話だけでなく、メールやホームページ上でできるようにしている。[聴覚障害]
- 面談につながりにくい場合に、まずはSNS相談「Cure time（キュアタイム）」を紹介した。[聴覚障害]

面談

- 被害の聞き取りについて、複数の機関が何度も同じ質問をしないようにするため、ワンストップ支援センターでは詳細を聞かないようにしたり、関係機関と事前に調整した。[知的障害]
- 面談では、平易な言葉を用いたり、紙や白板、図表等を用いるなど、本人の特性に応じた方法で、理解度を丁寧に確認しながら対応した。[知的障害、発達障害]

同行支援

- 面談中や同行支援中に体調等に変化が起きた時の対応方法を事前に確認し、飲み物や薬を飲めるようにしていた。[精神障害]
- 同行支援で公共交通機関を利用する際には、待ち合わせ場所や、交通機関の混雑状況などを確認しておいた。[肢体不自由]

その他

- 被害を受けたことを理解することが難しいなど、障害特性による被害の受けやすさが見受けられる場合には、絵本を活用するなどして、身体を大事にすることや性感染症等について教えるなど、再被害を防ぐための支援をした。[知的障害、発達障害、精神障害]
- 本人に被害認識や相談希望がない場合には支援が難しかったが、被害者の家族等からの相談に対応した。 [知的障害、発達障害]

○ 男性等に対する支援事例（概要）

男性等に対する支援事例の特徴

- 匿名での電話相談のみで終了し、面談や、関係機関と連携した直接支援にはつながらない事例が複数みられた。
- 被害を受けたことに対するショックや、羞恥心、自責感等が強く、被害について人に話したくない気持ちや、相談したことが誰かに知られるのではないかという不安があるために、支援に困難があった事例が複数みられた。
- 関係機関と連携した支援に至った事例では、個人情報保護に留意した上で、連携先に事前に情報共有するほか、男性等の性被害について説明し、二次被害防止のための配慮を求めている。
- 対応者の性別については、本人の希望を確認すると、必ずしも同性がよいわけではないため、本人の希望に合わせた対応をしていた。

支援に当たって配慮した点

電話相談

- 地元のワンストップ支援センターには相談しにくいということで、当該ワンストップ支援センターの所在都道府県外からの電話相談があった場合にも対応した。

同行支援

- 同行支援では、個人情報保護に留意した上で、連携先に事前に情報共有し、他に人がいない時間帯に行けるようにしたり、対応者の性別についての希望を伝えるなどの調整を行った。
- 診察の必要性に応じ、医療機関に肛門鏡があるかなどについて確認してから同行支援した。

機関連携

- 連携先が男性等の性被害の対応に慣れていない場合、相談しながら支援を進めた。

その他

- 性別に関わらず相談しやすくなるようにするため、ワンストップ支援センターの配布物等の表記やイラストについて、女性だけが対象になっていると受け取られないように工夫している。